
SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS No.122 August 2010

新センター長から



望月 哲男

数々の輝かしい足跡を残して7月末に任期満了を迎えた岩下明裕元センター長の後を継いで、望月哲男がほぼ15年ぶり、2度目のセンター長を務めさせていただきます。働き盛りの世代にちょっとだけ息抜きをしてもらいながら、新世代のエースに引き継ぐまでの時間を稼ぐための、旧世代人によるワンポイントリリーフという発想です。

このあわただしい時期にと危ぶまれるところも多いのですが、幸い目下のセンターは、岩下教授をリーダーとするGCOEプログラム「境界研究の拠点形成」、田畑教授がリードする新学術研究「ユーラシア地域大国の比較研究」、松里教授・家田教授・ウルフ教授のインターナショナル・トレーニング・プログラム、さらに宇山教授がリードする大学院教育（スラブ社会文化論講座）と、取り組むべき問題、進むべき方向性が決まっております、若手の同僚や研究員諸氏も含めて、俊足の精鋭がそろっています。センター長はただ馬車が空中分解しないように心がけながら、はるかスラブの草原でも思い浮かべていればよいでしょう。

とはいえ、われわれの小さな組織が共同利用・共同研究拠点としてそれなりに機能し、日本と世界のスラブ・ユーラシア研究に貢献していくためには、周囲の皆さまのご支援、ご協力が必須です。どうかこれからも、研究交流の場としてのセンターをご贖くださるよう、よろしくお願い申し上げます。

と、

望月・宇山両研究員が受賞

◆ 望月哲男研究員の受賞 ◆

センターの望月哲男教授によって新しく翻訳されたトルストイの『アンナ・カレーニナ』が、ロシア文学国際翻訳者センターの主催する2010年度のコンクールで最優秀翻訳賞（散文部門）に選ばれました。詳しくは15ページの木村崇氏のエッセイをお読み下さい。[編集部]

◆ 宇山智彦研究員の受賞 ◆



センターの宇山智彦教授が、2010年度（第25回）大同生命地域研究奨励賞を受賞しました。

大同生命地域研究賞は、国際的相互理解を考える上で最も基礎的な部分を担う「地球的規模における地域研究」に貢献した研究者を顕彰するために、財団法人大同生命国際文化基金が創設したものです。3つの部門のうち奨励賞は、地域研究の分野において新しい展開を試みた研究者2名に贈られます。

宇山氏の受賞は、「日本における現代中央アジア地域研究の発展に対する貢献」によるもので、授賞理由は以下の通りです。

「あなたは、わが国における本格的な中央アジア地域研究のパイオニアとして、中央アジア地域研究の確立、発展に多大の貢献をしてこられました。とりわけ、現地地で収集された膨大な現地語資料を用いた研究は、海外でも高く評価され、わが国の中央アジア研究の質の高さを国際的に広く発信してきました。

国際的研究大会での学術報告、諸外国語で執筆された論文発表を精力的におこなうのみならず、中央アジアに関する一般向けの書籍の出版にも積極的で、日本社会の中央アジア理解を深めることに大きな貢献をされました。」[編集部]



グローバルCOE

◆ 第三期展示開始～GCOE、南西へ ◆

「冬＝北」「夏＝南」、という訳ではありませんが、北大GCOEプログラム「境界研究の拠点形成」は、5月14日から北大総合博物館展示「海疆ユーラシアー南西日本の境界」を催しています。GCOEプログラムは、多くの地域の境界事象を相対化することを特色の一つとしていますが、実際に、日本の南北の境界は多くの共通点を抱えています。すなわち、19世紀後半、明治政府は「蝦夷地」を「北海道」として北の国境線の画定を進める一方で、琉球王国を日本に



土曜市民セミナーで講演する松田氏

統合して南の国境線の画定を試みていました。その後、日清・日露戦争、そして第二次世界大戦とを経て、南北の国境線が20世紀を通じて幾たびも変化します。度重なる国境線の移動は、境界地域に生活する人々に深甚な影響を及ぼし、経済的につながっていた隣接地域が国

境線で断絶されることにより、地域経済の崩壊や密漁、密貿易といった南北共通する現象が生じてきました。境界研究ブースでは、これら地域と台湾とのつながりを示すパイナップル缶詰レプリカや一般人のパスポート、沖縄が日本の国境外だったことを示す渡航証明書等を展示しております。

GCOE が主催する博物館土曜市民セミナーも、「南の島嶼」と題して展示に合わせた講演シリーズをおこなっています。各演題および講師は次の通りです。

5月15日（土）「八重山に息づく台湾：境域に暮らす」松田良孝（八重山毎日新聞記者）

6月19日（土）「八丈島の兄弟：小笠原諸島と開拓110周年を迎えた南北大東島」山上博信（国立民族学博物館共同研究員・日本島嶼学会理事）

7月17日（土）「無国籍を生きる」陳天璽（国立民族学博物館准教授）

9月18日（土）「海峡あれど国境なし：福岡・釜山フォーラムの事例を通じて」松原孝俊（九州大学韓国センター長）

これまでの企画との相乗効果のおかげか、引き続き満席の聴衆を集めています。セミナーには、常連（道民カレッジ履修者）だけでなく、新たな客層、特に南西の島々に関心を持つ若い層を取り込みつつあり、GCOE が掲げる目的の一つ「知見の社会還元」に適うものでもあります。参加者を通じて、人文系では接点がない理系の研究者達と知り合う等、タロイモの地下茎のごとく、拠点ネットワークも着々と広がりつつあります。

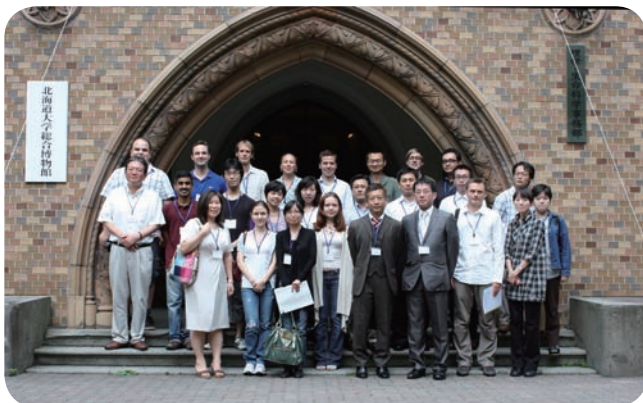
なお、博物館展示やセミナー情報以外にも単発のセミナーも随時開催しております。最新情報については、境界研究 HP (www.borderstudies.jp) で逐次発信しておりますので、是非アクセスしてみてください。[藤森]

◆ サマープログラムの開催 ◆

GCOE は目的の一つに若手研究者の育成・教育を掲げており、7月27日～8月4日にわたり、2010年度境界研究夏季教育プログラムを開催しました。「境界研究の東西架け橋」と題された本教育プログラムでは、日本の境界問題、旧ソ連（中央アジア、コーカサス、極東）における移民問題、ヒマラヤ地域における境界問題、アジアにおける境界問題（海賊対策や輸出入管



第三期展示の様子



北大総合博物館の前で

理)をテーマして、それぞれの分野を代表する内外研究者が英語による講義をおこないました。履修者も、学内だけでなく、海外10ヵ国(ロシア、カザフスタン、オーストラリア、中国、台湾、インド、トルコ、フィンランド、マケドニア、カナダ)からの若手研究者達が含まれており、連日、講師との間で活発な質疑がおこなわれました。本教育プログラムは、自らの専門外であった分野・地域の「境界問題」に馴染む機会となりました。また、センターや大学にとっても、英語による教育プログラムのノウハウを蓄積する場ともなりました。

今後、このような教育プログラムを続けることで、参加する若手研究者を通じて、境界研究ネットワークが一層拡充することが期待されます。[藤森]

◆ Eurasia Border Review Vol. 1, No. 1 の刊行 ◆

Eurasia Border Review (以下 EBR) の第1巻第1号が2010年6月に刊行されました。この EBR は、グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」が年に2回編集・発行する雑誌であります。従来の境界研究を扱う雑誌はヨーロッパや北米を中心としていたため、日本を含むアジアを扱う雑誌を創刊し、ユーラシア地域における分野横断的な境界研究を紹介することを目的としています。その対象は、研究者だけにとどまらず、実務家や政策決定者などといった多様なオーディエンスを対象としています。[池]



Part I -First Contact: Bringing Together the Worldwide Communities of Border Studies

<Current Trends in Border Analysis>

The State of Borders and Borderlands Studies 2009: A Historical View and a View from the Journal of Borderland Studies (Emmanuel Brunet-Jailly)

From Post-Modern Visions to Multi-Scale Study of Bordering: Recent Trends in European Study of Borders and Border Areas (Ilkka Liikanen)

<Borders in Practice>

The Scholar-Practitioner Interface in Boundary Studies (Martin Pratt)

How to Deal with Border Issues: A Diplomat-Practitioner's Perspective (Masataka Okano)

Part II-Voices of the Borderlands

<Targeting the Heart of Eurasia>

Border Politics in South Asia: A Case Study of India, Pakistan and Afghanistan (Mushtaq A. Kaw)

Special Status of Tribal Areas (FATA): An Artificial Imperial Construct Bleeding Asia (Sarfraz Khan)

Areas Between Afghanistan and Pakistan and the Present Turmoil (A. Ghafour Liwal)

<View from the Russian Far East>

Global and Regional Dimensions of China's Policy toward the U.S. (Oleg A. Timofeev)

新学術領域研究

◆ SRC 夏期国際シンポジウム開催される ◆

7月7～9日、2010年度センター夏期国際シンポジウム(新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の第3回国際シンポジウム)が予定通り開催されました。今回のシンポ

ジウムは、上記新学術領域研究でユーラシア地域大国の比較文化研究「地域大国の文化的求心力と遠心力」を遂行中のチーム（第6班）を中心に組織されたものです（組織委員長：望月哲男、事務局：越野剛、後藤正憲、井上岳彦）。

シンポジウムの全体テーマは、「Orient on Orient: Images of Asia in Eurasian Countries（ユーラシア諸国におけるアジアの自己表象）」とされ、「中国におけるサブカルチャー」、「アジアの表象Ⅰ」、「アジアの表象Ⅱ」、「音楽における東と



会場のようす

西」、「宗教とイデオロギー」、「越境する作家たち」、「場所の精神」の7セッションが設けられました。報告者総数は21名（うち外国人研究者14名）で、パネリスト総数36名という、2日半の催しとしては欲張りな企画でしたが、日本、中国、ロシア、インド、アメリカ、イギリス、ドイツ、スウェーデンなど、いろいろな国や地域でユーラシア文化研究をおこなっている専門家たちが研究対象地域、研究分野、方法論を越えて交流し、議論する中から、きわめて新鮮で刺激的な発見・知見を得ることができたように思います（総参加者116名）。

とりわけ、1) ロシア・インド・中国というユーラシア地域大国における「アジア」意識の濃淡や、「オリエンタリズム」概念への関心度の差、2) 現代的なマイクロ・メディア環境における複製文化・大衆文化の発達と呼応した文化の均質化、「アジア・イメージ」の商品化の問題、3) 国民・民族表象とジェンダー表象や階層表象などとの複雑な相互関係、といった問題について、今回の国際対話は有益な認識をもたらしてくれました。また、従来われわれの研究地図に入っていなかった音楽のジャンルで、きわめて深いオリエンタリズム研究がなされていることも、新たな発見でした。

なお海外からのゲストを中心として、シンポジウムの後に京都と東京で関連プログラム「もうひとつのユーラシア」（7月11日同志社大学）、「FINDAS研究会」（7月14日東京外語大本郷サテライト）がそれぞれおこなわれました。[望月]

2010年SRC夏シンポジウム「ユーラシア諸国におけるアジアの自己表象」

日程：2010年7月7日～9日 場所：北海道大学スラブ研究センター大会議室（403号室）

使用言語：英語

7月7日（水）

プレコンファレンス・セッション 「中国におけるサブカルチャー」

司会：デビッド・ウルフ（センター）

1. 千野拓政（早稲田大）「われわれはどこへ行くのか？：東アジアの都市文化が共有する文化的変容、ならびに近代文化の誕生と終焉について」
 2. 雷啓立（華東師範大、中国）「ミニメディア時代における文化＝政治とポスト80年代世代」
 3. 顧錚（復旦大、中国）「サブカルチャーから現代アートへ：中国のコスプレ文化」
- コメンテーター：張英進（カルフォルニア大、サンディエゴ、米国）

7月8日（木）

オープニング：岩下明裕（センター）

セッション1 アジアの表象 I

司会：望月哲男（センター）

1. S. V. シュリーニヴァース（ヴァンガロール文化社会研究センター、インド）「アジアを表象すること：インド映画のブルース・リーから『チャンドニー・チョウク・トゥ・チャイナ』まで」
2. イリーナ・メーリニコヴァ（同志社大）「ロシア映画におけるシベリア・極東の先住民のイメージ」
3. 張英進（カルフォルニア大、サンディエゴ、アメリカ）「中国、日本、ロシアの紛糾するイメージ『パール・サンセット』（2001）における風景と言語」

コメンテーター：中村唯史（山形大）

セッション2 アジアの表象 II

司会：野町素己（センター）

1. アンナ・フロルコフスカヤ（スリコフ芸術学院、ロシア芸術研究アカデミー）「1960-1980年代モスクワ反体制派芸術における東洋の精神」
2. 応雄（北海道大）「『アジア』の生成：中国の大衆劇『白毛女』の翻案におけるプロパガンダ / 誘惑、物語 / 踊り」
3. 富澤かな（東京大）「共感と偏見：18世紀末イギリス「オリエンタリスト」のインド観とその多面性」

コメンテーター：乗松亨平（東京大）

セッション3 音楽における東と西

司会：杉本良男（国立民族博物館）

1. 井上貴子（大東文化大）「1800年頃の南インドにおける西洋音楽の受容」
 2. ベネット・ゾン（ダーラム大、英国）「19世紀イギリスにおける非西洋（アジア）音楽の表象」
 3. 梅津紀雄（工学院大）「ロシア音楽における東洋的要素と西洋によるその受容」
- コメンテーター：伊東信宏（大阪大）



セッション3のようす

7月9日（金）

セッション4 宗教とイデオロギー

司会：松里公孝（センター）

1. リュドミーラ・ジューコヴァ（ロシア人文大）「現代ロシアにおける宗教とイデオロギー」
 2. エリック・シッケタンツ（東京大）「明治大正期の日本人仏教徒が見た中国の仏教」
 3. 住家正芳（センター）「百年前の旅行者：梁啓超と新渡戸稲造の社会進化論的な目線」
- コメンテーター：ヴァジム・ジダーノフ（フリードリヒ・アレクサンダー大、独）

セッション5 越境する作家たち

司会：越野剛（センター）

1. リサ＝リョウコ・ワカミヤ（フロリダ州立大、米国）「トランスナショナルな観点から見たロシア系アメリカ人の文学」
 2. 小松久恵（センター）「『desi』について語る：現代インド系英国人作家にみる帰属意識」
 3. 杉山直子（日本女子大）「役に立つ過去・口に出せない秘密：M. H. キングストンの女武者」
- コメンテーター：毛利公美（一橋大）

セッション6 場所の精神

司会：宇山智彦（センター）

1. エルザ＝バイール・グチノヴァ（ロシア科学アカデミー民族学人類学研究所）「ソヴィエト後のエリスタ：西洋における東洋の一角」

2. ツプルマ・ダリエヴァ（筑波大）「場所を作る：東洋とヨーロッパの間のバクー・プロムナード」
3. マーク・バッシン（セーデルテルン大、スウェーデン）「地理の不確定性：ロシア・ヨーロッパ・アジアに関する四つの見解」

コメンテーター：浜由樹子（津田塾大）、高橋沙奈美（北海道大）

◆ 全体集会開かれる ◆

7月7～9日の国際シンポジウムに引き続き、7月10日（土）に新学術領域研究の全体集会在センターで開催されました。今回の全体集会是、8～9月に本領域研究に対する中間評価がおこなわれることから、「これまでの研究の集約と今後の研究の方向性」をテーマとしました。プログラムは下記のとおりで、基本的に各計画研究班の代表がこれまでの各班の研究成果と今後の研究の方向性について報告しました。討論者は、岡部達味氏（東京都立大学名誉教授）と



全体集会のようす

小長谷有紀氏（国立民族博物館）にお願いしました。痛いところも沢山突かれましたが、本領域研究の今後の発展につながるコメントをいただけたと思っています。また、人文科学系の研究と社会科学系の研究を今後統合していくために何をしなければならないかという大きな課題の展望も見えてきたように思います。この全体集会の内容は、『地域大国論集』第4号として刊行される予定です。[田畑]

日時：7月10日（土）14:30～17:45

司会：西山克典（静岡県立大）

・第1部 14:30～16:00

田畑伸一郎（北海道大）「ロシア、中国、インドの経済発展モデルの比較」

唐亮（早稲田大）「体制移行戦略に関する中露の比較研究」

岩下明裕（北海道大）「ユーラシア大国の関係分析と行動比較」

討論者：岡部達味（東京都立大名誉教授）

・第2部 16:15～17:45

宇山智彦（北海道大）「帝国史の比較：構造・認識・関係性・変化」

山根聡（大阪大）「越境者たちの故国への再還元と輪郭の再形成にみる地域大国の比較研究」

望月哲男（北海道大）「ユーラシア諸国の文化的相互認識：見えるものと見えないもの」

討論者：小長谷有紀（国立民族博物館）

研究の最前線

◆ 黒龍江省社会科学院との学術交流協定 ◆

6月14日にハルビンにおいてセンターと黒龍江省社会科学院との間の学術交流協定の調印



調印を終えて、曲偉院長と握手

主催の第3回東北アジア地域協力発展国際フォーラムにセンター長代理として田畑が出席した際に執りおこなわれました。この協定には、研究者の交換、共同研究の促進、研究会の開催、学術情報の交換などが盛り込まれています。

黒龍江省社会科学院は、黒龍江省人民政府のシンクタンクとして大きな役割を果たしています。同院には10の研究所と1つのセンターがあり、研究員は約210人です。スラブ研究センターととくに関係が深いのは、東北アジア研究所とロシア研究所です。とくに、東北アジア研究所の笈志剛副所長が、2009年11月に設立されたアムール・オホーツクコンソーシアムの中国代表の幹事となったことから、環オホーツク海環境研究において同院との一層密接な研究協力が予定されています。さらに、現在、センターで実施されている2つの大型プロジェクト（新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」とグローバルCOE「境界研究の拠点形成：スラブ・ユーラシアと世界」）に関連して、黒龍江省でフィールドワークをおこなうことが見込まれており、それに対する同院の協力も約束されています。同院東北アジア研究所には、昨年、センターの大学院（文学研究科スラブ社会文化論）を修了した封安全さんも勤務しており、今後の研究協力関係の一層の深化が期待されます。[田畑]

がおこなわれました。センターは、低温科学研究所などとともに環オホーツク海環境研究を推進しているなかで、黒龍江省社会科学院との協力関係がこの数年進展しました。とくに、2009年11月には、オホーツク海の環境保全に向けた国際シンポジウムの開催に合わせて、同院院長（党委書記）を団長とする6名の代表団がスラブ研究センターを訪問した際に、本協定の締結について最終的な話し合いがおこなわれました。協定の調印式は、6月14日に黒龍江省社会科学院主

◆ 2010年度科学研究費プロジェクト ◆

2010年度のセンター教員・研究員が代表を務める文部省科研費補助金による研究プロジェクトは次の通りです。[編集部]

基盤研究 (A)

望月 哲男 ヴォルガ文化圏とその表象をめぐる総合的研究 (2009-11年度)
ウルフ ディビッド 北東アジアの冷戦：新しい資料と展望 (2009-12年度)

基盤研究 (B)

松里 公孝 ロシアにおける宗教復興：公共機能、ライフヒストリー、空間動態 (2009-11年度)
宇山 智彦 近代化とグローバル化の文脈における比較帝国史 (2009-12年度)
林 忠行 ラテンアメリカと中東欧の政治変動比較：民主主義の定着過程の比較動態分析 (2009-12年度)
松里 公孝 宗教、国家、マイノリティが織りなす環黒海跨境政治 (海外) (2009-11年度)

基盤研究 (C)

木山 克彦 極東地域における^{まっかつ}鞅鞅に関する考古学的研究 (2008-12年度)
長縄 宣博 帝国とメッカ巡礼：ロシアのムスリム地域の視点から (1865～1914) (2010-12年度)

兔内勇津流 ロシア正教の教義確立とフィラレート (2010-12 年度)

若手研究 (B)

越野 剛 ロシア・ウクライナ・ベラルーシにおける歴史小説の比較研究 (2009-11 年度)

後藤 正憲 ロシア・チュヴァシにおけるト占の歴史人類学的研究 (2009-11 年度)

青島 陽子 ロシア帝国諸民族の統合政策：辺境・教育管区への教育政策に関する比較研究 (2009-12 年度)

野町 素己 カシュブ語統語論の総合的研究 (2010-12 年度)

宮本 万里 ブータンにおける環境保護行政と村落社会の価値体系の再編に関する政治人類学的研究 (2010-13 年度)

井潤 裕 旧ソビエト周縁地域における都市空間の歴史の変遷：極東・ウクライナ・中央アジア (2010-11 年度)

草野佳矢子 帝政ロシアの統治官僚と地方自治：第一次革命前ロシア内務省の組織と活動 (2010-12 年度)

研究活動スタート支援

星野 真 中国における地域所得分布二極化の実証分析：東アジア・新興国との比較研究 (2009-10 年度)

学振特別研究員奨励費

菊田 悠 中央アジア定住地帯の秩序の再編成プロセスにおけるイスラーム聖者と聖性の役割 (2007-10 年度)

佐藤 圭史 ソ連末期における民族問題マトリョーシユカ構造の実証研究 (2008-10 年度)

安達 大輔 近代的読書メディアとしてのロシア・ロマン主義文学研究：「社交界小説」を中心に (2009-11 年度)

宮崎 悠 公共宗教と国民形成の政治力学：ポーランド・ナショナリズムとカトリック教会 (2010-12 年度)

学振外国人特別研究員奨励費

ベアトリーチェ・ペナティ (研究代表者・宇山智彦) ウズベキスタンにおける土地水利改革：集団化以前の農村社会のソヴィエト化 (2009-11 年度)

◆ ヨウコ・リントステット教授の来訪 (GCOE・SRC 特別セミナー他) ◆

去る6月17日(木)、フィンランドを代表するスラヴ語学者の1人であるヨウコ・リントステット教授(ヘルシンキ大学)をお迎えした特別講演会がおこなわれました。リントステット教授は南スラヴ諸語、特にブルガリア語文法の専門家として著名ですが、古代教会スラヴ語研究、バルカン言語学、言語接触論と関心の幅は広く、近年では『コニコヴォ福音書』の文献学的研究などでも成果を上げられています。尚、教授の研究のうち特に重要な論文は、生誕50年記念に刊行された論文集 *Kontakto kun Balkanio* (Helsinki, 2005) で読むことができます(無料でホームページからダウンロード可)。



リントステット教授講演会のようす

以上の確固たる言語研究を背景に、現在はフィンランド学士院の支援を受けたヘルシンキ大学のプロジェクト“Updating the Sociology of Language in the Balkans”のリーダーとして、社会言語学の研究も進められており、今回の講演はこのプロジェクトの研究成果の一部でもあります。“Cross-Border Linguistic Nationalism in the Central and Eastern Balkans”と題さ

れた本講演では、ブルガリア本国ではたいてい「ブルガリア語」とみなされている言語構造を持つ言葉、すなわち「バルカニック」特徴（バルカニズム）を持つ南スラヴ諸語（ブルガリア語、マケドニア語、セルビア語のティモク・プリズレン方言）を題材に、19世紀末から現在に至るブルガリアの越境的な言語ナショナリズムの諸問題が論じられました。尚、アルバニア内の南スラヴ人、ギリシアのポマク、マケドニア、セルビア、アルバニアの国境に分断されているゴラ人の言語とアイデンティティについても言及されるなど、比較的狭い地域にもかかわらず言語、宗教、文化の問題が複雑に入り組んでおり、そして国境が民族のおかれている環境に重要なファクターとなっていることが改めて提示されました。

リントスット教授は、バルカン半島の言語背景に加え、歴史的背景、文化的背景と先行研究を十分に踏まえて持論を進められ、言語学者は「客観的」と思われる言語学的アプローチだけでは上記の言語ナショナリズムの諸問題が決して解決しないことを自覚するべきであり、当地域における学際的研究の必要性を強調されました。

本講演会で印象に残ったのは、教授が国家のアイデンティティが相互に排他的であるという考えをはっきり「誤り」と断じていたことでした。マケドニア人であればブルガリア人にはなれず、ブルガリア人がマケドニア人であることもできないという考えが主流を占めていることについて、オフリドの聖ヨヴァン・カネオ教会の例を挙げて論じられました。カネオ教会は、建立当時はセルビア領内にあり、しかも当時はブルガリア人とマケドニア人の区別は存在しませんでした。したがって、ブルガリア人とマケドニア人どちらの文化遺産であるか争うのではなく正教徒の南スラヴ人共通の文化遺産と見なすべきであるとの主張は、ナショナリズムを考える上で興味深く、聴講者の共感を呼んでいました。

尚、6月19日には日本西スラヴ学研究会との共催で“Towards Understanding the Balkan Linguistic Area”と題された特別講演会がおこなわれました。これは「バルカン言語連合」についてバイリンガリズム研究からアプローチするもので、講演後には活発な議論がおこなわれました。[西原周子・野町]

◆ 外国人研究員リュドミラ・ポポヴィッチ教授の講演会 ◆



ポポヴィッチ教授講演会のようす

6月25日に、本年度の外国人研究員リュドミラ・ポポヴィッチ教授（ベオグラード大学）が、東京大学文学部スラヴ語スラヴ文学研究室にて講演会をおこないました。題目は「動作様態（Aktionsart）の記述の認知言語学的モデル」で、ロシア語、ウクライナ語、セルビア語における当該現象を3次元的に解釈して各語の比較をおこない、それぞれの特徴を明らかにすることを試みたものでした。

「動作様態」の研究は、動詞の体の研究とならんで、スラヴ語研究で最も重要なテーマの一つです。

本講演会においてポポヴィッチ教授は、Aktionsart 研究史（主に意味論的アプローチと語形成論的アプローチ）と問題点を概観した上で、教授が用いる認知言語学的モデルの有用性を

踏まえて、上記の3語の比較をおこないました。この講演会が沼野充義教授の大学院ゼミの枠内でおこなわれたため、専門外の方にもわかるように懇切丁寧な解説がなされました。系統的に非常に近い3言語について、しかも意味的なニュアンスの違いがときに大変捉えにくくなる接頭辞についてきわめて精密に論じられたので、私たちのような外国人がこの分野に挑戦するハードルの高さを感じざるをえませんでした。当該分野の専門家である金子百合子氏（岩手大学）などから積極的な質問が出るなど、専門的な議論も活発におこなわれました。尚、ポポヴィッチ教授の講演内容にご興味がおありの方は、教授の著書『言語的現実像：対照分析の認知的側面 (Jezička slika stvarnosti: kognitivni aspekt kontrastivne analize)』（ペオグラード、2008）を参照されると良いと思います。

また、2日後の6月27日の日本ロシア文学会北海道支部会では、ポポヴィッチ教授の特別講演会「ロシア、ウクライナ、セルビアフォークロアにおける色彩名称の意味的な潜在性」がおこなわれました。本講演会では、色を意味する形容詞と名詞との語結合の可能性が、フォークロアテキストを題材に比較検討されました。色彩語彙の研究も認知言語学や民族言語学などにおいて重要なテーマですが、スラヴの伝統言語文化における類似性と多様性を提示する本講演は、専門を異にする言語研究者、文学研究者にとっても大変興味深いものとなりました。

尚、9月27日（月）に予定されているGCOE研究会では、セルビアのヴォイヴォディナ地方におけるルシン人の諸問題について報告されます。ご関心のある方はセンターのホームページをご覧ください。近日中に報告のレジュメがアップされる予定です。

上記の講演会の組織に当たり、沼野充義、乗松亨平両先生、日本ロシア文学会北海道支部の関係者の皆様には大変お世話になりました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。[野町]

◆ 公開講座 ◆

地域大国比較の試み：ロシアを中国やインドと比べたら何が分かるか？ が開かれる

センターの今年度の公開講座が、「地域大国比較の試み：ロシアを中国やインドと比べたら何が分かるか？」をテーマに5月10日（月）から31日（月）まで7回にわたって開催されました。センターでは、2008年度より新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」が開始されており、今年度の公開講座では、このプロジェクトに参加している研究者を講師に招いて、研



熱心に聞き入る受講者

究成果の一端を分かりやすく解説しました。例年の公開講座と異なる大きな特徴は、講師に、スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧地域）の研究者だけでなく、中国やインドの専門家が多数含まれたことでした。受講者数は87名を数えました。受講者に対するアンケートにより、中国やインドに対する関心が予想以上に高かったことが分かりました。[田畑]

回	日程	講義題目	講師
第1回	5月10日(月)	ロシア、中国、インドの共通性：経済の視点から	田畑伸一郎（センター）
第2回	5月14日(金)	アフガニスタンをめぐる「小さな冷戦」：ロシア、中央アジア諸国、中国、インド	山根聡（大阪大学）
第3回	5月17日(月)	新興3カ国の連携の思惑と限界：国際政治学の視点から	伊藤融（防衛大学）
第4回	5月21日(金)	BRICsの台頭と世界経済の行方	佐藤隆広（神戸大学）
第5回	5月24日(月)	中国の連環画・ポスターに見えるロシア・ソ連イメージ	武田雅哉（北大文学研究科）
第6回	5月28日(金)	都市＝農村関係の中露比較	田原史起（東京大学）
第7回	5月31日(月)	グレートゲーム再考：中央アジアから見た英中露帝国	宇山智彦（センター）

◆ 2010年度特任教員（外国人）の変更 ◆

10月から赴任予定だったタラス・クジオ氏が家庭の事情で今年度の来日が困難となったため、下記の、副候補者として選抜されていた方々を招へいすることに決定しました。[荒井]

マリコヴァ、マリア (Malikova, Maria)

所属・現職：ロシア科学アカデミーロシア文学研究所（プーシキン館）比較文学部上級研究員
研究テーマ：歴史的移行期への人類学的アプローチ：ネップ期の大衆文学をテスト・ケースとして

予定滞在期間：2010年10月1日～2010年12月31日（3ヵ月）

ホスト教員：望月

ランセル、ディビッド (Ransel, David)

所属・現職：インディアナ大学歴史学部教授

研究テーマ：後期ソヴィエト～ポストソヴィエト期の市民のアイデンティティ

予定滞在期間：2011年1月9日～2011年3月31日（3ヵ月）

ホスト教員：ウルフ

◆ 2011年度特任教員（外国人）決定 ◆

2011年度における外国人特任教授の審査がおこなわれ、40人の応募者の中から、以下の6名の正候補者が、過日の協議員会で承認されました。[荒井]

アスタフィエヴァ、エレナ (Astafieva, Elena)

所属・現職：高等研究実習院（パリ）講師

研究テーマ：パレスチナ～シリアにおけるロシアのプレゼンス：政治、宗教、文化の諸相から（1772-1905年）

予定滞在期間：2011年6月1日～2011年10月31日（5ヵ月）

カムセラ、トマシュ (Kamusella, Tomasz)

所属・現職：オポレ大学東スラヴ言語学研究所（ポーランド）准教授

研究テーマ：スラブ諸語の3分類：言語学的結論か、政治的産物か、あるいは偶然か

予定滞在期間：2011年6月1日～2011年10月31日（5ヵ月）

クジオ、タラス (Kuzio, Taras)

所属・現職：トロント大学ウクライナ研究講座上級研究員

研究テーマ：ウクライナ現代史

予定滞在期間：2011年11月1日～2012年3月31日（5ヵ月）

レヴィントン、ゲオルギー (Levinton, Georgij)

所属・現職：ヨーロッパ大学人類学部（サンクトペテルブルグ）教授

研究テーマ：マンデリシュタムとドストエフスキー：スラブ主義、土壌主義、反ユダヤ主義

予定滞在期間：2011年6月1日～2011年10月31日（5ヵ月）

シャフナザリヤン、ノナ (Shakhnazaryan, Nona)

所属・現職：クバン社会経済大学歴史学・哲学・社会学部准教授

研究テーマ：しぶとく残る古い慣習：3つのポスト社会主義社会における縁故主義、情実、腐敗

予定滞在期間：2011年11月1日～2012年3月31日（5ヵ月）

シシキン、ヴラジミル (Shishkin, Vladimir)

所属・現職：ロシア科学アカデミーシベリア支部歴史学研究所社会・政治発展史部門長

研究テーマ：大戦、革命期（1917-1922）のシベリアと極東におけるロシアの国家体制

予定滞在期間：2011年11月1日～2012年3月31日（5ヵ月）

◆ 2010年度鈴川・中村基金奨励研究員決定 ◆

今年は例年よりも少ない5名の応募があり、以下の3名の方が採用されました。以下、五十音順。[長縄]

採用決定者・所属	テーマ	希望滞在期間	ホスト教員
志田 仁完 一橋大学経済研究所	ソ連邦構成共和国第二経済発展の決定要因分析	2010年 8月2～20日	田畑
藤本 尊正 大阪大学大学院	19世紀後半、ウラジオストクの衛生と住民	2010年 8月中で調整中	ウルフ
鈴木 健太 東京大学大学院	1980年代後半のセルビアのナショナリズムと民主主義	2011年 1月21日～2月10日	家田

◆ モスカリョフ氏の滞在 ◆

2010年6月21日よりドミトリイ・モスカリョフ (Moskalev, Dmitrii) 氏（ウクライナ国立科学アカデミー付属東洋研究所）が国際交流基金のフェローとしてセンターに約1年の予定で滞在されています。

モスカリョフ氏は若手の現代日本語研究者で、主に日本語とウクライナ語、ロシア語との対照研究に従事しています。センターでの研究テーマは「現代日本語におけるモダリティの文末の複合述語表現（ウクライナ語との対照研究）」となっています。[野町]

◆ 専任研究員セミナー ◆

前号以降、次の専任研究員セミナーが開催されました。

・5月10日 ウルフ、ディビッド「Stalin: Man of the Borderlines」

センター外コメンテータ：横手慎二氏（慶応大学）

この論文でウルフ研究員は、第二次世界大戦末期から戦後世界形成期におけるスターリンの外交政策を取り上げ、国境問題という切り口を通して対東欧外交、対中国外交、対イラン・トルコ外交を比較分析しました。スターリンが「国境線の変更」をどのように実現しようとしたのか、また「国境線の変更」を通して何を實現しようとしたのか、スターリンの歴史意識、ナショナリズム観などを通してこうした問題が論じられています。討論者としてこの問題領域で日本の第一人者である横手慎二氏（慶応大学）に参加していただき、活発な議論がおこなわれました。

・5月12日 宇山智彦「Changing Religious Orientation among Kazakh Intellectuals in the Tsarist Period: Between Sharia, Secularism, and Philosophical Search」

センター外コメンテータ：坂井弘紀氏（和光大学）

この論文は宇山研究員にとっての研究の出発点ともいえるカザフ知識人論をイスラム及び文学という視点から発展させたものであり、ドイツで出版される本の一章となる予定の論考です。本論文では様々な作家の文学作品論を通してカザフ知識人の19世紀後半から20世紀初頭にかけての思想的な足跡がイスラーム、ナショナリズム、世俗化、哲学的探究をめぐって分析されました。討論者にはセンターの研究員でもあった坂井弘紀氏（和光大学）が招かれ、熱のこもった議論が展開されました。[家田]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース121号以降の、センターでおこなわれた北海道スラブ研究会、センターセミナー、新学術領域研究会、GCOE研究会、及び昼食懇談会の活動は以下の通りです。[大須賀]

- 5月14日 屋良朝博（沖縄タイムス論説委員）「なぜ沖縄に米軍がいるのか 普天間の行方」（GCOE・SRC特別セミナー）
- 5月22日 第12回サハリン・樺太史研究会 竹野学（札幌医科大）「第二次大戦後樺太からの引揚1945～1949」；Ia. シュラトフ（東京大）「ポーツマス講和会議におけるサハリン問題」（センター・GCOE共催）
- 6月1日 白岩孝行（北大低温科学研究所）「アムール川とオホーツク海：陸海境界・国境を越えた環境システムの発見と保全」（第7回GCOE・SRCボーダースタディーズ・セミナー）
- 6月2日 井上暁子（センター）「故国喪失から越境へ：1980年以降のドイツ在住ポーランド人作家の文学」；瀧口順也（センター）「『政治劇場』の創造：政党大会の比較研究－ポリシェヴィキ、ナチス、イギリス労働党」（北海道スラブ研究会総会）
- 6月4日 趙全勝（アメリカン大）“China’s Approaches to the East China Sea Disputes with Japan and South Korea”（GCOE・SRC特別セミナー）
- 6月7日 P. ウェクスラー（テルアヴィヴ大、イスラエル）“Cross-border Turkic and Iranian Language Retention in the West and East Slavic Lands and Beyond: A Tentative Classification”（GCOE・SRC特別セミナー）；A. マルチュコフ（ロシア科学アカデミー言語学研究所）“Rare Phenomena in Case Marking and Their Implications for a Theory of Typological Distributions”（GCOE・SRC特別セミナー）
- 6月8日 安田稔（パーミンガム大、英国）「ウクライナの経済構造：産業関連表の分析を中心に」（センターセミナー）
- 6月17日 J. リントステット（ヘルシンキ大、フィンランド）“Cross-Border Linguistic Nationalism in the Central and Eastern Balkans”（GCOE・SRC特別セミナー）

- 6月23日 横濱雄二（北大文学研究科）「文学と国境：菊田一夫『君の名は』における北海道と沖縄」（第8回 GCOE・SRC ボーダースタディーズ・セミナー）
- 7月1日 高橋美野梨（日本学術振興会特別研究員・筑波大）『「北極利権問題」とデンマーク：『機能的な中立性』に基づく外交的リーダーシップをめぐる』（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 7月6日 張英進（カリフォルニア大、米国）「アメリカにおける近現代中国文化研究の現状：文学、図像、映像」（中国語）（新学術領域研究スペシャル・セミナー）
- 7月10日 A. モリソン（リヴァプール大、英国／SRC）“Twin Imperial Disasters: The Invasions of Khiva and Afghanistan in the Russian and British Official Mind, 1839-41”（新学術領域研究第4班研究会）
- 7月11日 P. アルト（タンペレ大、フィンランド／SRC）“The Emerging New Energy Agenda and Russia: Implications for Russia’s Main Markets in Europe”；D. ミトロヴィチ（ペオグラード大、セルビア）“No Big News in the Dragon’s Nest: China’s Response to the Challenges of the World Economic Crises”（新学術領域研究第3班研究会）
- 7月15日 A. ベケシュ（リュブリャナ大、スロベニア）「シェンゲン協定以降のスロベニア語：言葉の国境もなくなるか」（GCOE・SRC 特別セミナー）
- 7月20日 R. マクマホン（オハイオ州立大、米国）“The South Asian Triangle: American, Soviet and Chinese Regional Interventions, 1947-1971”（新学術領域研究、科研「北東アジアの冷戦」共催）
- 7月22日 A. モリソン（リヴァプール大、英国／SRC）“Metropole, Colony and Imperial Citizenship in the Russian Empire”（特別講義）
- 8月17日 志田仁完（一橋大）「ソ連構成共和国の第二経済：規模の推計の試み」（鈴木・中村基金奨励研究員報告会）

望月哲男訳『アンナ・カレーニナ』ロシア文学 翻訳最優秀賞受賞までのみちのり

木村 崇（京都大学名誉教授）

世界の各地で翻訳されているロシア文学のなかから優れたものを顕彰しようというごきが生まれたのは、ほんの数年前のことである。ソ連崩壊とともに研究環境をどん底にまで落とされてしまったロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所（通称「プーシキン館」、在サンクトペテルブルグ）が、ようやく持ち直しはじめたところだった。傘張り浪人的生活に堪えて研究を維持してきた人たちは、必死になって内外の様々な競争的外部資金（грантなる新語ができていた）を確保しながら成果をあげてきた。しかしソ連崩壊は思わぬ副産物も産み落とした。民主化と国際化の萌芽が見えだしたのである。

現在プーシキン館の所長をしているアカデミー通信会員のフセヴォロド・バグノ氏はもともとスペイン文学が専門である。ちなみにこの研究所には非ロシア文学系出身の研究者がけっこういる。ソ連時代が続いていれば、かれが所長に選ばれる（研究所内の選挙結果をふまえて科学アカデミー総会で最終選考）可能性はまったくなかったであろう。ロシア連邦成立から15年以上も経っていたのに、バグノ氏の所長就任は再選挙の結果ようやく決まったほどなのだ。必要以上に内情を明かす気はないがじつは、世界中にひろがっているロシア文学研究者、翻訳者たちと積極的に交流を深めようとしていたバグノ氏の前には、ソ連時代から研究所の上層部をとりしきっていた重鎮たちが大きな壁となって立ちはだかっていたのである。

3年前の秋口、ペテルブルグに来て「国際ロシア文学翻訳者センター」構想の立案に力を貸してくれという依頼がバグノ所長から来た。2007年の11月初旬、招集された人々は財団「Русский мир」のグラントを獲得するためにコンセプトをにため、事業内容をつぶさに検討



した。討議はドストエフスキー・ホテルに缶詰になつてのべ3日間続いた。外国からは私以外にたしか、イギリス、ドイツ、イタリア、イスラエル、フィンランドなどからも招かれていたが、多数を占めたのは地元サンクトペテルブルグやモスクワの出版人や編集者など、実務関係者だった。ともかくもセンター構想のアウトラインは決まった。世界各国のロシア文学翻訳者たちにとって実利のある機能の充実とか若手翻訳者養成事業への取り組みが盛り込まれた。

発足した翻訳者センター（Международный центр переводчиков русской литературы на языке мира）から昨年末、さっそく具体的な要請があった。あらたにセンター秘書となったクセニヤ・エゴロヴァ（彼女自身もプーシキン館の若手研究員）からつぎつぎにメールが届きだした。私に課せられた仕事のひとつは、日本におけるロシア文学翻訳出版物の過去7年間分の文献リストを作成することだった。日本ロシア文学会のホームページはじつに充実していて、ロシア文学に関連する書籍を月ごとに集約して掲載する欄がある。私はそれをもとに、ロシア文学翻訳関係書だけを抜き取ってローマ字に翻字し、ロシア語の原題と作者を示すだけですんだ。これはセンター・ホームページの「Мониторинг」という欄に載ることになっている。今のところ文献リストは英・独・伊・蘭・波蘭・日からしか届いておらず、「建設中」の状態にあるようだ。この欄にはさらに、翻訳出版予定情報や、ロシアでは評価を得ているのに、まだ外国語に翻訳されていない作者などの情報が載るそうである。

もうひとつの仕事は、日本で出版された優れたロシア文学翻訳のなかから受賞対象作を推薦する仕事である。訳者個人や出版社が応募する形はとらず、各国のロシア文学会や翻訳者協会、およびこれに準ずる機関の代表者に推薦権が与えられるとのことであった。私は日本ロシア文学会国際交流委員会委員長の資格で推薦人に指名された。わが国の翻訳界事情を考慮すると、利害関係からはほど遠い私がかたずさわるのが無難だと考え、指名を受けることにした。

推薦枠は、散文初訳部門、散文新訳部門、韻文初訳部門、韻文新訳部門の4つである。それぞれ厳しい条件があって、初訳は年齢が35歳未満に限られている。また選考対象は2007年から昨年までに出版されたものという限定があった。韻文は、近年話題になるほどの翻訳がなされたとは記憶していなかったので、考慮の対象を散文だけに絞ることにした。初訳部門対象作はさいわい年齢のしぼりがあったので、対象作の選定に苦労はなかった。問題は新訳である。光文社が「古典新訳」という文庫本を次々に出しているせいか、他の出版社からの新訳もふえたように思う。短期間ですべてに目を通すことなどとうてい無理である。しかし推薦するのは私なのだから、二葉亭にならって私自身の「翻訳の標準」に照らし、本屋で立ち読みして少しでも外れるものはまず除外しようときめた。こうして残ったものを何編か手元において比較・精査したのである。

二葉亭はさておき私の場合「標準」となるのは第一に、訳文に訳者自身の「地声」や「クセ」が残っていないことである。「米川調」とか「神西調」というものは、ロシア文学翻訳史における過渡的現象だと思っている。これについては一昨年ロシア文学会研究発表会のさい、望月氏を司会にたてアメリカ文学翻訳家の柴田元幸氏を対論者に招いて企画したワークショップで、沼野、吉岡両氏と並んで私が報告した際に、「朗読調」をできるだけ排除する視

覚障害者むけの「音訳」の作法にヒントを得てのべた考えでもある。もうひとつの「標準」は、日本語の根幹構造（平安時代から現代まで貫かれている不変部分）ともいべき特徴にできるだけ素直であることである。いかにも翻訳を読まされているという印象（通訳になぞらえるなら、たとえば「同時通訳調」スタイル）からほど遠いものを、私は評価するのである。この「標準」を満たすという点で望月訳に勝るものはなかった。だからといって、マイナス点がより少なかったからという消極的理由で評価したわけではない。

大型の書店に行けば現在は3種類の文庫版『アンナ・カレーニナ』が並んでいるだろう。一番古いのは新潮文庫の木村浩訳、次が岩波文庫の中村融訳で、再新が光文社古典新訳文庫の望月訳である。違いがよく分かるので冒頭箇所の一部を並記してみよう。

1. オブロンスキー家ではなにもかも混乱してしまっていた。妻は、夫がかつて我が家にいた家庭教師のフランス夫人と関係していたことを知って、もうとても一つ屋根の下でくらすことはできないと宣言したのだ。（新潮版）

2. オブロンスキー家では何もかもがめちゃくちゃだった。妻は、夫が前にうちにうた家庭教師のフランス女と関係があったことに気づいて、もはやこれ以上、一つ家に同居は出来ない、と夫に向かって言い切った。（岩波版）

3. オブロンスキー家は大混乱のさなかにあった。夫が以前家庭教師に雇っていたフランス女と関係を持っていたことに気づいた妻が、もう一つ屋根の下には暮らせないと、面と向かって宣言したのだ。（光文社版）

助詞「ハ」の用法という点では、いずれもさして問題はないように思える。しかし1、2よりは3のほうがあきらかに自然である。なぜだろう。前2者は一見「甲ハ乙ガ〜ダ」という日本語の基本構文に沿っているように見えるが、じつは無理がある。段落冒頭の文なのに、場所の副詞句を「甲」の位置においたため、隠れた比較対象、つまり「他の家々とは違って」という言外の意味までも伝えているからである。これが許されるのは、よその家のことがそれまでに話題にのぼったのちである。また前2者は主題部（妻は）と述部が文の最前部と最後部に離れ、複雑な従属複文構造が間に挟まってしまい、読者に余計なストレスを与えている。3は、従属文の前半部を修飾節に変えて主題部の前に移すことによって、文構造を単純化して訳出している。ストレスなくすなおに読めるのはこの工夫が施されたからである。声に出して読んでみれば分かるが、新潮版は原文のリズムが無視されている。原文の動詞が「完了体」であることを意識しすぎたためであろう。この訳者は、別のところでも「妻は自分が使っているいくつかの部屋のほかに…」と、わざわざ複数形であることを強調して訳出しているが、そのため文章が間延びしてしまったことには無頓着である。原文の文法構造ばかりに忠実なあまり、二葉亭のいう「音調」を乱してしまつたとみるべきだろう。トルストイのロシア語はあくまでも端正なまでの簡潔性が特徴なのである。

これに類する例は無数にあげることができる。訳文を分析すればするほど、望月訳が画期的なものであることに幾度も気づかされた。推薦文はそのことに力点をおいて書いたつもりである。私としては、あとは審査を待つだけだと気を抜いていた。ところが今度は私を эксперт（鑑定人）に任命する、ついでには папятка эксперту（鑑定指針）にしたがって экспертное заключение（鑑定見解）を提出せよというのである。「鑑定指針」というのが「〜ねばならない」という項目を列挙した、じつにお役所的悪文の典型で、正直言って腹が立ってしまった。なにしろ「否定の見解を提出する場合は1頁ないし1.5頁におさまらねばならない」などと分量指定をわざわざ太字で書いてあるのである。私はクセニヤさんに、こんな意味不明な指針では見解の書きようがないといって、不明点を列挙してメールを送った。「ノー

ベル賞方式に準じて」などといわれても、どんな形式にするのか知るわけがないし、「世界文化の文脈に於ける作者の特徴付け」などといわれても、神様じゃなきゃ分かるはずがないと書いて送った。

彼女とは今年1月別の用件でプーシキン館を訪れたさいに会っており、多少「気心を知りうる」間柄であった。そのおかげだろう、じつに懇切丁寧な説明と裏情報がメールで帰ってきた。これで気を取り直し、私はようやく鑑定見解をまとめ終えた。おかげで、魯迅や有島武郎が『アンナ・カレーナ』から大きな影響を受け、一連の作品を書いていることなども勉強することができた。

クセニヤさんからはその後も、翻訳文の電子テキストを送ってくれとか、電子テキストはないと答えると、それじゃあスキャンしてせめて10～15頁くらい送れ、いやそれだけじゃなくやはり、翻訳書全4巻が必要だから至急郵送してほしいとか、あれこれ注文が続いた。翻訳センターのホーム・ページには指名された鑑定人8名と、審査委員5名の名前があがっている。どうやらこの矢継ぎ早の催促は、その審査委員の一人で、モスクワにある世界文学研究所のБ.Л. Рифтинという中国文学の専門家が、自分のところの日本文学研究者に目を通させたいと主張したためだったらしい。それを知ってちょっと緊張したが、結局杞憂に終わった。

以上が今回の慶事の裏舞台である。

戦争描写のアクション・ソープオペラ化

松里公孝（センター）

北海道大学およびスラブ研究センターの寛大な理解を得て、この5～6月に上海の華東師範大学国際関係・地域研究学院に招かれ、大学院のゼミを提供した。予想通り、当方にとっても、おそらく先方にとってもなかなかない体験だったが、それ自体については稿を改めてまじめに論じるとして、今日はやや軽い話題を。

アクション・ソープオペラ（メロドラマ）という言葉が私が思いついたのは、2009年のソ連の大祖国戦争（対独戦）戦勝記念日（5月9日）を北コーカサスのスタヴロポリで迎えたときだった。さすがにこれほどの祭日になると誰もインタビューに応じてくれないので、ホテルのテレビで（赤の広場の300メートル上をほとんど新幹線並みの速度で軍用機が飛んでしかも落ちないロシアの軍事技術に驚嘆させられるのと同時に）1日中戦争映画を観ることになる。かつてはソ連で作られる対独戦をテーマにした映画は、アンドレイ・タルコフスキーの『僕の村は戦場だった』（1962）を典型として、観たら一週間くらい食欲をなくすような深刻さで人間性や社会性を問いかけるような映画のみであったが（それ以外の表現は、検閲以前に国民感情が許さなかったであろう）、こんにちのロシアでの大祖国戦争の描き方は全く違う。大祖国戦争を007シリーズと同程度の娯楽として楽しむ、恋ありアクションありの表現が許容されるか、おそらく支配的なのである。

典型的なのは、『運命の皮肉：続編』（2007）で敵役だったセルゲイ・ベズルーコフを主演としたテレビ映画『41年7月』（2008）である。この映画は、モロトフ・リップントロップ協定でソ連領となったベラルーシ西部を舞台としている。ベズルーコフが演ずるソ連将校イワン・ブーロフが対独国境近くのまちに帰省中なのだが、実は彼の恋人は、ソ連支配に武力抵抗するポーランド人パルチザンの親玉の娘である（彼女は、全編、ポーランド語でしか話さない）。ロミオとジュリエットのような切ない恋愛描写の後に、戦争が始まる。ソ連の国境

警備と軍が殲滅された後に一人生き残ったブローフは、ランボーかシュワルツネッカー並みの強さを発揮して、たった一人でドイツ軍の後方を攪乱する。『運命の皮肉：続編』でも物議をかもしたベズルーコフのにやけた笑窪はこの映画でも健在であり、こんなヤサ男がなぜこんなに強いのかという疑問を抱かせずにはいない。いずれにせよ、業を煮やしたドイツ軍は、ブローフの恋人のポーランド娘を人質にして、彼をおびき出す。ブローフは、それが罠と知りつつ一人でドイツ軍部隊に挑戦して壊滅させ（これはミッション・インポッシブル並みの馬鹿馬鹿しい映像であり、見るに耐えない）、恋人を救出し、自分は死ぬ。

このほかにも、ジャニーズ系の青年たちが鍛えられて屈強なスパイになるとか、今日のロシアにおける対独戦の描き方は、娯楽性が著しい。しかし、帝国主義戦争の性格がより著しかった日中戦争についてさえ、今日の中国のテレビにおける描き方がアクション・ソープオペラ化しているのは意外であった。

たとえば『謀変 1939』というドラマでは、細菌兵器の開発に重要な役割を果たす皇軍将校（男やもめの、おそらく医療将校）が、自分の秘書と娘の家庭教師を兼ねて中国人女性（チャイナドレスを着た麗人である）を雇う。実はこの女性は中共のスパイであり、将校のところに出入りする重要書類を小型カメラで撮影している。将校は進歩的で、自分の娘には日本の詩歌だけではなく中国の詩歌も学ばせなければならないという信念から中国女性を雇っているのである（中国人は漢文という借用文化が日本で普及しており、日本人が杜甫や李白を暗唱できることを知らないので、「日本の詩歌、中国の詩歌」などという奇妙な対置がなされるのである）。将校は、自分が好意を感じる中国人を大量殺害する兵器を開発することに対する良心の呵責に耐え切れず、任務を辞退して日本に帰ることを決意する。そこで、スパイとは知らないままに中国人秘書にその意思を伝え、「一緒に日本に来てくれないか」とプロポーズする（このあたりは典型的なガヴァネスものの展開である）。秘書は、「私たちの国は戦争しているんですよ。そんなことはできませんわ」と答える。そこで将校は、「わかった。では戦争が終わるまで君のことを待っているから、戦争が終わったら来てくれ」と言う。

もともと憎からず想っているところにこんなことを言われたものだから、この中共の女性スパイはノックアウトされてしまい、任務を続ける意欲をなくす。しかし、党の上級機関に「好きになってしまったのでこれ以上スパイはできません」とは言えないから、「すでに戦意を失っており、任務を辞退するつもりなので、これ以上スパイする意味はない」と報告する。ところがこの医療将校の動揺は特高警察の察知するところとなり、再びやる気を起こさせるために、特高はこの将校の妹を殺害して、それを中国の特務機関がやったように偽装する。復讐心に燃えた将校は、任務に復帰する、とまあこんな感じで、かなりばたばたしたストーリーが続く。ところでこのドラマでは、特高の将校に女性が多い。人を拷問死させるのが任務だった機関の将校に女性がなれたとは私には思えないのだが、どうだったのか日本近代史の専門家に教えてもらいたい。彼女たちは、ダサイ皇軍風の制服ではなく、太ももの膨れたナチス・ドイツに似た制服を着ている（日本の皇軍や特務機関がナチス・ドイツ風の制服を着ているのは、他の日中戦争ドラマにも共通である）。こうした制服を着て活躍（暗躍？）する彼女らの役に、ドラマ製作者が異常に美しい女優をあてるので、やや猟奇趣味的な印象が醸し出される。

建国 60 周年の昨年製作された『八路軍』というドラマには、次のようなストーリーがある。八路軍が急襲して、皇軍の部隊を壊滅させる。一人生き残った将校は、ひどい負傷をしているが、半狂乱の状態で玉砕しようとする。八路軍側は何とかこの将校を助めたいと思うが、日本軍人が軍規上降伏できないことは知っているので、一計を案じる。日本語が達者な八路軍人が柔道で勝負をつけようと申し出て、銃を捨てさせる。しばらく柔道を演じた後、初めて気付いたような振りをして、「何だお前は負傷しているではないか。負傷したお前に勝った

ら、私の名誉は傷つけられる。まず傷を治せ。そこでもう一度勝負しよう」などと言って、なんとか丸め込んで捕虜にしてしまう。ところがこの将校に肩を貸しつつ八路軍の野戦病院キャンプにつれてくると、「鬼子（クイズ。元々は普通名詞で、たとえばドイツのファシストは德国鬼子と呼ばれていたが、実際には日本人を表す固有名詞になった。実は今でも使われている蔑称）を連れてきた」ということで大騒ぎになる。皇軍にジェノサイドされた村からこの病院に志願した看護婦は、バケツでその日本人将校（と彼に肩を貸している中国人）に水をぶちかけて、「私は八路軍兵士に奉仕するためにここに来た。鬼子を助けるためではない」と叫ぶ。ここで朱徳が直々に介入して演説する。「日本人捕虜に対するわれわれの任務は反戦教育を施すことである。これは党の決定であり、これが守れない者は党規違反である」と。

この日本人将校は、八路軍に親切にされるものだからアイデンティティ危機を起こしてしまい、食事がのどを通らなくなる。この将校をかつて助けた中国人は、うどんを作って食べさせようとするが、将校はどんぶりを叩き割ってしまう。中国人は、「このうどんを作るのにどれだけ手間がかかったと思っているんだ。このキャンプの他の傷病兵が何を食べているか比べてみる」と怒る。日本人将校は、「私が今まで何をしてきたか、これから何をしたいかわからなくなった」と号泣して答えるのである。

ここで紹介した中国のアクション・ソープオペラは、それでもなおヒューマンズムを感じさせる良質なもので、こんにちの中国のテレビで放送されている日中戦争ドラマの中には、もっと俗悪なものもざらにある。しかし、中国側の英雄的抵抗よりも、侵略者（日本側）の内部事情を描いてドラマを面白くしようとするモチーフは多くに共有されている。そのため、日本軍人や特務機関員は見事な中国語で喋ることになる（ハリウッド映画ではローマ人もキリストもナチス・ドイツも英語で喋るのと同じである）。侵略者の中にもどうしようもない人間とそれなりに良心のある人間がいたという見方は、リアリズムの立場から評価できるものだろう。中国人は反日的だとか、日本人に永遠の戦争謝罪を求めていると思っている日本人には、こんにちの中国のテレビ・ドラマを観ることを勧めたい。

北大公共政策大学院の中島岳志氏が書いた東京裁判パール判事についての本を、小林よしのりという漫画家が批判した記事を先日インターネットで見たが、侵略戦争の被害者の側が苦痛に満ちた記憶を娯楽として楽しむ度量を見せているときに、日本人の過去の受けとめ方はセンスが古いなあと感じざるを得なかった。まあ、清濁併せ呑みすぎる傾向のある中国人に比べて、この生真面目さこそが日本人のいいところなのかもしれないが。

生き残りをかけるもう一つのブルガリア語文化： セルビアのバナト・ブルガリア語の現状

野町素己（センター）

バナト地方のブルガリア人

6月末から7月初旬にかけて、セルビアのバナト地方南部にあるイワノボ村を訪問した。2010年度の「国際バナト・ブルガリア・ミーティング」への出席、現地調査のためである。イワノボはベオグラード近郊（東に35キロ程）にある村で、人口は1200人弱（2002年調査）である。村の人口の大半はハンガリー人が占めているが、他のボイボディナ地方の村と比較して、ブルガリア人の存在が特徴的である。イワノボでは300人程度（総人口の30%弱）である。彼らは正教徒ではなくローマ・カトリック教徒で、しばしば「バナト・ブルガリア人」と区別される。また彼らの信仰がいわゆる「パウロ派」に端を発することから、自分たちを「バ

ルチェニ (Palčeni)」とも呼んでいる。セルビアではイワノボのほか、スコレノヴァツ、ペーロ・プラト、コナク、ヤシャ・トミッチにもその存在が知られている。

バナト・ブルガリア人は、18世紀にオスマン・トルコの支配から逃れて、主にブルガリア北西部からハプスブルク帝国内のバナト地方（現在のルーマニア側）に移住したブルガリア人の末裔で、現在はルーマニアのヴィンガ、スタル・ビシノフなどがその文化的中心となっている。セルビア側のバナト・ブルガリア人は、後にスタル・ビシノフから移住してきた人たちで、その最も大きい集落が上記のイワノボである。

バナト・ブルガリア人とその言葉：二つのブルガリア語？

バナト・ブルガリア人の言葉は、主にブルガリア北西方言が基礎となっている。19世紀半ばまで、教会では祈祷の言語として「イリリア語」（クロアチア語）を用いていたが、1851年に聖職者イムレ・ベレツが、ハンガリー語のラテン文字体系を用いて、バナト・ブルガリア人の言葉で「小カテキズム」を出版したのを皮切りに、宗教関係の書物や暦などが出版され始めた。またドイツ系の聖職者ヨズ・リルが、啓蒙も目的としてクロアチア語のラテン文字を応用したバナト・ブルガリア語正書法（1866年）およびバナト・ブルガリア語初等文法（1869年）を刊行した。これによりバナト・ブルガリア語は、日常会話のみに用いられる方言ではなく、ある程度の規範を有する文章語になったのであり、この言語による文化活動が広まっていくことになる。

本国のブルガリア語は東部方言、特にバルカン方言が基礎となり、それに西部方言の要素が加わったものである。したがって、本国の文章語とバナト・ブルガリア語文章語の方言的基盤は異なる。それに加え、バナト・ブルガリア語は、ブルガリア語の文語形成に極めて重要な役割を果たした教会スラヴ語、ロシア語、ブルガリア諸方言からの影響を全く受けなかったため古い言語的特徴を有している一方で、ドイツ語、ハンガリー語、ルーマニア語、セルビア語などの周辺



『私たちの声』紙：Náša の a は女性形ではなく定冠詞

の言語の直接的な影響を受ける環境にあった。つまり、バナト・ブルガリア語は、ブルガリア語と規範が異なる変種的1言語ということになる。この事実は、ブルガリア言語学界がマケドニア語は独立した言語ではなく、ブルガリア語の1変種と主張し続ける間接的な根拠にもなっている。

ルーマニア側のバナト地方では、ハンガリー政府によって19世紀末から第1次大戦までの間に使用を禁止されるなど一時的な中断はあったものの、1930年代から第2次世界大戦までは教会関係の出版物だけではなく、新聞や世俗の出版物も刊行された。しかし共産主義政権下ではバナト・ブルガリア語による文化活動が禁じられ、その代わりにブルガリア人マイノリティとして言語教育も本国のブルガリア語によるもののみとなった。チャウシェスク政権が崩壊した1989年以降、バナト・ブルガリア語による文化的活動が再開し、現在ではバナト・ブルガリア語及びブルガリア語による新聞『私たちの声』、ルーマニア語の記事もある雑誌『文学思想』の他、ラジオ放送やテレビ放送も行われている。またバナト・ブルガリア語による



『イワノバチキ・ドボシャル』紙。セルビア語のほかに、ハンガリー語、バナト・ブルガリア語、ブルガリア語、ルーマニア語、スロバキア語、マケドニア語、アルーマニア語、クロアチア語、ロマ語による記事がある

フ編の『バナト・ブルガリア文学アンソロジー第1巻』（2010年、ティミショアラ）などで読むことができるし、現在もこの言語で執筆活動するものが出てきている。

セルビアにおけるバナト・ブルガリア語のいま

以上はルーマニア側の話であり、体制転換以降の「ルネサンス」も主にルーマニア側が中心である。ミレティッチやストイコフの調査もルーマニア側で、セルビア側の情報が極めて少ない。そこで上記の『私たちの声』紙の編集部の手紙を書き、セルビア側の言語状況と出版物について尋ねてみた。返事はすぐに届き、イワノボが拠点であり、バナト・ブルガリア語の記事もある新聞『イワノバチキ・ドボシャル』を教えてくれた。そこで今度はセルビア・ジャーナリスト協会に連絡し、その新聞の編集者の連絡先をお願いした。返事が来るまでひと月程かかったが、編集者ヨシフ・ワシルチン氏の連絡先を手に入れたので、すぐに連絡した。バナト・ブルガリア人であるワシルチン氏は、セルビア側のバナト・ブルガリア語による出版物は極めて少なく、上記『ドボシャル』（2007年に第1号刊行、2009年に18号まで出たが現在は休刊中）以外には2008年に出た詩集が1冊（セルビア語からの翻訳）あるだけで、また執筆活動を行う者も殆どいないと教えてくれた。しかしバナト・ブルガリア語を良く知る古老がいるから実際に会って直接話を聞くのが一番で、丁度6月末にルーマニア、ブルガリアからゲストを招いた「国際バナト・ブルガリア・ミーティング」が開かれるからと来訪を勧められたのが、冒頭の「ミーティング」に出席することになったいきさつである。

ワシルチン氏のお陰で、一般の話者から村の言語文化保護の活動家や神父から話を聞くことが出来た。結論から言うと、セルビアのバナト・ブルガリア語はルーマニア側に比べて保護の度合いが低く、絶滅の危険にある。ほぼすべてのバナト・ブルガリア人がハンガリー語とのバイリンガルで、同時に非常に多くがセルビア語とのトリリンガルである。この3言語の中で使用範囲が最も狭いのがバナト・ブルガリア語である。歴史的にこの言語による教育はなく、基本的に日常会話に限られてきた。全体的な人口が少ないこと、バナト・ブルガリア人が住む村が分散していること、経済力が弱いことから、バナト・ブルガリア語の出版はもとよりテレビ放送やラジオ放送なども極めて難しい。バナト・ブルガリア語の危機を意識する若者も、母語の保護は重要だが自身も自由に読み書きできないと残念がっていた。

歴史教科書なども出版されはじめている。これは政治体制の変化だけではなく、EUが推進する多言語・多文化主義が支えるところが大きい。

この言葉の文化については19世紀末から20世紀初頭の言語学者リュボミール・ミレティッチによる一連の著作（主要な論文は『セドミグラツコ及びバナトのブルガリア人の研究』（1986年、ソフィヤ）に再録）、方言学者ストイコ・ストイコフの『バナト方言』（1967年、ソフィヤ）および『バナト方言の語彙』（1968年、ソフィヤ）に詳しく述べられている。また、戦前の文学作品の一部はミキ・マルコフ編の『バナト・ブルガリア文学アンソロジー第1巻』（2010年、ティミショアラ）などで

以上に加え、教会との関係も重要である。イワノボのカトリック教会では、ミサは通常ハンガリー語で行われるので、これもバナト・ブルガリア語を日常から遠ざける要因となる。バナト・ブルガリア語でミサを行えるのは、100キロ以上離れたズレニャニンに住むストヤン・カラピシ神父ただ1人で、バナト・ブルガリア人の村を1人で巡回するのは不可能だ。そしてバナト・ブルガリア人の多くはハンガリー語もよくできるので、彼らにも問題はないのである。

また多言語使用に端を発する混血も衰退の要因になる。筆者が滞在した家は、主人がバナト・ブルガリア人、夫人はセルビア人であった。主人はバナト・ブルガリア語が話せるが、夫人と子供とはセルビア語のみで会話する。主人の両親（70代と80代、2人ともバナト・ブルガリア人）を紹介していただいたが、同行した孫との会話はセルビア語のみであった。つまり、この一家では3世代で言語が消滅している。

僅か35キロ先には大都会ベオグラードがある。若者に魅力的な職がない貧しい村に残る理由はないし、混血を抑える有効な手段もない。そしてセルビア人やハンガリー人が実用的ではないバナト・ブルガリア語を学ぶ理由もないのである。

バナト・ブルガリア語を保護するために

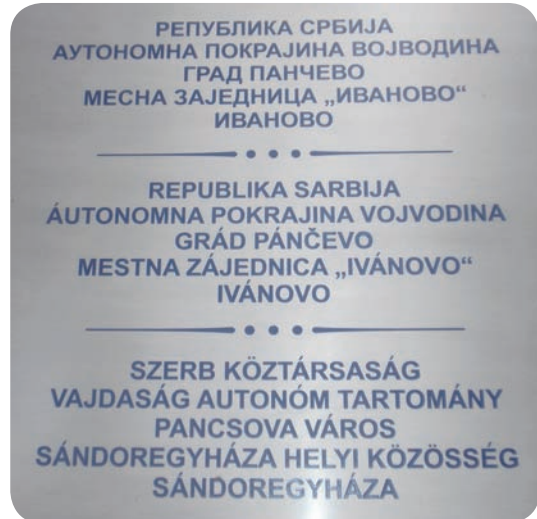


バナト・ブルガリア語 コースの終了証

旧ユーゴスラヴィアでもバナト・ブルガリア人は「ブルガリア人マイノリティ」と扱われていたが、2010年3月、8年にもわたるワシルチン氏の粘り強い交渉の結果、役所などはセルビア語、ハンガリー語、バナト・ブルガリア語の3言語表示になった。共産主義時代にほぼ断絶していたルーマニア、ブルガリアとの越境的共同プロジェクトも年を追って充実している。さまざまな文化プログラム、レクリエーション、そして円卓会議などで各地の代表が交流する「国際バナト・ブルガリア・ミーティング」もその成果である。

パンチェボ市にある多文化保護の民間団体 In Medias Res、村の古老アウグスティン・カラピシ氏の尽力で、今年から民間レベルでバナト・ブルガリア語教育が始まり、既に9人の卒業生が出た。またワシルチン氏は、この現状に鑑み、さまざまな団体から経済支援を取り付け、地元出版物を増やし、またルーマニアからバナト・ブルガリア語による出版物を輸入し、地域住民が共同で利用できる図書館を計画しているという。

ブルガリアからの支援も目覚ましい。ブルガリア政府の支援の下、イワノボではボイボディナで唯一、初等教育でブルガリア語学習が選択科目として可能になり、ブルガリア語の出版物も多く寄贈されている。しかし教育内容はブルガリア本国の言葉と歴史が中心であるから、バナト・ブルガリア言語文化の保護に直接的に繋がっていないようにも見える。



役所名の標示：上からセルビア語、バナト・ブルガリア語・ハンガリー語

いかに一般のパナト・ブルガリア人の自己意識を高め、言語使用環境を整えるか、これには長い時間と弛まぬ努力が必要であり、当事者、実務者、研究者の密接な協力のみによって実現しうる。中でも言語文化の正確な記述とその教育への応用など、言語学者の役割は大きい。忍び寄る言語文化の死への無念を嘆く古老たちに接し、研究に対する真摯な気持ちと責任を改めて感じるイワノボ訪問となった。

学 界 短 信

◆ 2015年 ICCEES 世界大会は幕張で開催 ◆



7月29日にストックホルムでおこなわれた ICCEES 評議会で、2015年の ICCEES 世界大会を千葉・幕張でおこなうことが、挙手採決の結果、満票で可決されました。すでにこの1年前、ICCEES 執行委員会は幕張を候補地として提案することを決めていましたが、評議員から対案は提出されず、むしろ、もともとは（グラスゴー開催を掲げて）ライバルだった BASEES の幕張支持発言を受けて採決がなされるという、まるで共産党中央委員会総会のような美しい展開でした。

全体セッション「『東からの視点』などあるのか？」のようす

ストックホルム世界大会そのものも、5年前のベルリン大会での日本人のペーパー数が15本程度、韓国や中国からの参加皆無に近かったのが、日本人のペーパー数が53本、韓国人・中国人が31本、そのほかインドから相当数の参加があるなど、ICCEES の様変わりを実感させる大会でした。東からの参加を増やすため、スウェーデンの実行委員会が様々な特例(?)措置をとってくれたことも、ここで感謝をこめて明記しないわけにはいきません。

なお、評議会が開催された翌日の夜6時から、「『東からの視点』などあるのか？東アジアにおけるスラブ・ユーラシア研究」と題する全体セッションがおこなわれました。これは大会組織委員会の求めに応じて松里が組織したもので、日本から宇山、田畑、北京から劉文飛（ロシア文学会事務局長）、上海からフェン紹雷（華東師範大学国際関係地域研究学院長）、韓国・漢陽大学からリー・ムンヨンらのオールスターが報告しました（池田嘉郎氏のエッセイ参照：<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/20100805ikedaj.html>）。ウプサラ大学のヘトランド教授をはじめ聴衆から非常に賞賛された企画でしたが、いかんせん金曜日の夜だったので聴衆の数自体は少なかったです。大会実行委員が「しまった。こんなにいい企画なら大会の最初にすればよかった」と言っていました。後の祭り。いずれにせよ、アジアのスラブ・ユーラシア研究の存在感を示す世界大会となりました。

なお、ストックホルム世界大会に先立つ7月9日、JCREES 幹事会は、「ICCEES 本部が主導すること、松里 ICCEES 日本代表が中心となって資金面及びスタッフ人材面での責任を取ること」を条件として、幕張世界大会に対して「モラル・サポートをおこない、各学会は内容面、特にパネルなどでサポートする」という決定を下しています。国内外の意思決定がなされましたので、幕張世界大会実行委員会の旗揚げ、HPの立ち上げなどをおこなう初期準備期間に入りました。[松里]

＜ITPメンバーの参加＞

なお大会では長期派遣フェロー経験者6名を含むITPメンバー21名が研究発表をおこないました。多くが個人発表のカタチでしたが、杉浦史和、左近幸村、高橋沙奈美の3名はパネルも組織しました。ITPプログラム英語合宿での「原稿を読まない」発表スタイルの特訓や英語論文執筆講習会での勉強の効果もあったようです。国際学会で英語を使って発表することが若手研究者の間で根付いてきたことが感じられます。[越野]



世界組織らしく見えるようになった ICCEES 評議会
(7月29日)

◆ 比較経済体制学会第50回全国大会開かれる ◆

比較経済体制学会の今年度の全国大会が6月5日～6日に大阪市立大学で開催された。今年の大会では、「世界経済におけるエマージング・エコノミー」が共通論題とされ、とくに、BRICsを念頭に置いて、エマージング・エコノミー（新興経済）の世界経済のなかでの位置付けや、エマージング・エコノミーが世界経済のシステムや秩序をどう変えようとしているのかについて議論がなされた。旧社会主義諸国あるいは移行経済諸国に限らない比較がおこなわれたという意味で、意義のある共通論題になったように思われた。今年度の秋期大会は10月16日に上智大学で開かれ、来年度の夏の全国大会は東北大学で開催される予定。[田畑]

◆ 学会カレンダー ◆

- 2010年8月26-28日 欧州比較経済体制学会第11回隔年大会 於タルトゥー大学（エストニア）
 - 10月9-10日 2010年度東欧史研究会・個別研究報告会 於聖心女子大学・東京広尾
 - 10月16日 比較経済体制学会秋期大会 於上智大学
 - 10月16-17日 ロシア史研究会2010年度大会 於立教大学池袋キャンパス
 - 10月23-24日 2010年度ロシア・東欧学会 於天理大学
 - 11月5-7日 日本ロシア文学会第60回全国大会 於熊本学園大学
 - 11月18-21日 AAASS第42回年次大会 於ロサンゼルス
 - 12月11-12日 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第4回国際シンポジウム「帰と拡散：地域大国における人間の移動と越境」 於大阪大学
 - 2011年7月7-9日 新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」第5回国際シンポジウム 於北海道大学
- センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。[大須賀]

図書室だより

◆ サハリン・樺太史関係新収資料 ◆

今年に入ってから、サハリン・樺太関係の古書を数点購入しましたので、紹介します。

1. 樺太哥爾薩古夫市街区画地連絡地図 / 五十嵐武彦編 大泊：正木貞雄，1906年10月 -- 1枚；100 × 67cm. 三色刷り．表紙のタイトル：樺太市街区画明細図 其の一 コルサコフ大泊ノ部．縮尺：4,000分の1
2. 樺太島漁場実測図 / 編集兼発行人丸田徳太郎．札幌：北海道水産新報社，1904年4月．-- 1軸；37cm. 縮尺：300,000分の1. 単色刷 樺太全図（2色刷り）および漁場明細表を付す．
3. 亞港市街圖 / 薩哈唎洲派遣軍司令部．[アレクサンドロフスク?]：薩哈唎洲派遣軍司令部，1920年10月，1921年6月．2枚．45 × 61 - 47 × 63cm（折りたたみ 23 × 16-24 × 16cm）単色刷 縮尺 5,000分の1
4. 北樺太軍政施設寫真帖．[出版地不明]：薩哈唎軍政部，1925年5月印刷．1冊；28 × 39cm（奥付には、「印刷 陸軍省構内小林又七印刷所」とあることから、東京で製作されたものと思われる。）
5. 北樺太．[アレクサンドロフスク：薩哈唎軍政部]，1922年2月印刷．264p 折り込み付図3枚「部外秘」

以上の資料は、センター研図書室でご利用いただけます。[兔内]

◆ 附属図書館の「再生事業」 ◆

2009年度、附属図書館の耐震改修および老朽改修を内容とする「再生事業」が4年計画で開始され、今年度は、本館南側に「新営棟」を建設するとともに、本館西側を大改修するなど、工事が本格化してきました。

工事に伴う利用者への影響は、これまで、夜間開館の停止や騒音の発生等ありましたが、今後、今年度については、西側書庫に収容された大型コレクション類（ベルンシュタイン、ギブソン、中村文庫等を含む）やマイクロ資料、貴重書庫資料の利用停止、および、法学研究科棟と附属図書館との連絡通路の閉鎖が予想されます。

また、来年度については、予算次第の面がありますが、現在の構想通りに進行すれば、スラブ・コレクションを含む東書庫および、スラブ研から移動した和書や学位論文、製本雑誌等を収容する東南書庫、文学部からの移動資料や新聞バックナンバーを収容する南書庫の資料が、一時外部に移送され、半年以上利用停止となることが予想されています。

また、「再生事業」終了後の資料配置については、現在、附属図書館と協議中です。

つきましては、今後、しばらくの間、附属図書館からのアナウンスに注意くださいますよう、お願いいたします。[兔内]

ウェブサイト情報

2010年4～6月までの3ヵ月間における、センターのホームページへのアクセス数（但し、gif、jpg、png等の画像形式ファイルを除く）の統計です。[山下]

	全アクセス数 (1日平均)	うち、邦語表紙 アクセス数 (1日平均)	うち、英語表紙 アクセス数 (1日平均)	国内からの アクセス数 (%)	国外からの アクセス数 (%)	不明 (%)
4月	357,673 (11,922)	13,853 (462)	3,181 (106)	102,412 (29%)	201,608 (56%)	53,653 (15%)
5月	393,402 (12,690)	14,381 (464)	2,900 (94)	104,545 (27%)	236,374 (60%)	52,483 (13%)
6月	359,780 (11,993)	13,594 (453)	2,268 (76)	126,542 (35%)	180,102 (50%)	53,136 (15%)

編集室だより

◆ スラブ研究センターレポート No. 7 ◆ 「日米同盟における地域的安全保障と沖縄」

北海道大学グローバル COE プログラム「境界研究の拠点形成」とスラブ研究センターが、2010年3月9日にワシントンの東西研究所及び笹川平和財団 USA との共催で開催した「日米同盟における地域的安全保障と沖縄」の記録をお届けします。

センターがワシントンのシンクタンクと共催するシンポジウムはこれで3度目ですが、当日は、国務省、国防総省、各種シンクタンク、日米のメディアなど150名を越える聴衆で満席となり、これまで以上に大きなインパクトを現地に及ぼしました。

とくにパネル2では、沖縄在住の研究者と地元メディアのリーダーが、普天間問題を中心にとりあげ、沖縄からみた日米同盟の問題点や克服すべき方向性を見事な英語で報告し、参加者の多くに感銘を与えました。[岩下]

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publictn/report/00index.html>

◆ 『スラヴ研究』 ◆

『スラヴ研究』第58号（2011年春刊行予定）の原稿締切は、従来通りに戻り、8月末です。センターのホームページに掲載されている投稿規程・執筆要領等を熟読のうえ、締切厳守でご提出ください（事前申し込みは不要です）。[長縄]

会 議 (2010年4～7月)

◆ センター運営委員会 ◆

2010年度第1回 7月9日

- 議題
1. 拠点運営委員会委員長の選出について
 2. 規程等の改正について

◆ センター協議員会 ◆

2010年度第1回 5月11日

- 議題
1. 次期北海道大学スラブ研究センター長候補者の選考及び投票について
 2. 黒竜江省社会科学院との学术交流協定について

2010年度第2回 7月20日

- 議題
1. 2009年度支出予算決算について
 2. 2010年度支出予算配当(案)について
 3. 定年退職教員の再雇用について
 4. 特任教員(旧外国人研究員)候補者の選考について

みせらねあ

◆ センターの役割分担 ◆

2010年度8月以降のセンター研究部専任教員の役割分担は、下記の通りです。[望月]

センター長 望月
副センター長 田畑

【学内委員会等】

教育研究評議会、部局長等連絡会議 望月
教務委員会 望月
図書館委員会 兎内
情報ネットワークシステム学内共同利用委員会 山村
競争的資金にかかわる委員会 家田
創成研究機構運営委員会/連絡会議 望月
アイヌ・先住民研究センター運営委員会 岩下
オホーツク環境研究ネットワーク 田畑
全学運用教員審査会委員 望月
北方圏フィールドセンター委員 山村

【学外委員等】

国立大学附置研究所・センター長会議 望月
ICCEES 日本代表 松里
JCREES 事務局長 望月
地域研究コンソーシアム理事 望月
地域研究コンソーシアム運営委員 家田/野町
京都大学地域研究統合情報センター拠点運営委員 岩下

京都大学東南アジア研究所拠点運営委員 家田
 東京外大 AA 研拠点運営委員 岩下

【センター内部の分担】

大学院講座主任・教務委員会.....	宇山	マリコヴァ (2010.10.1-12.31)	望月
入試.....	山村	モリソン (2010.6.1-10.28)	宇山
将来構想.....	田畑／松里／宇山／岩下	ポポヴィチ (2010.6.2-9.30)	野町
総合特別演習 (金曜) 担当.....	松里	ランセル (201.1.9-3.31)	ウルフ
全学教育科目責任者.....	望月	ヴィソコフ (2010.10.1-2011.3.31)	荒井
全学教育科目総合講義.....	荒井	鈴木・中村基金.....	長縄
全学教育科目演習.....	望月	日本人客員研究員.....	山村
点検評価.....	松里／田畑	公開講座 (2010 年度)	田畑
冬期シンポ (12 月) 新学術.....	長縄	専任研究員セミナー.....	家田
冬期シンポ (12 月) GCOE.....	岩下	諸研究会幹事.....	家田
図書.....	家田	雑誌編集委員会.....	宇山／長縄／野町
情報.....	岩下	(望月)／松里／ウルフ	
予算.....	田畑	欧文雑誌.....	ウルフ／松里／(野町)
外国人プログラム FVFP.....	望月／田畑	和文雑誌.....	長縄
アルト (2010.6.1-9.30)	田畑	ニューズレター和文.....	家田／(岩下)
フェン (2010.11.1-2011.3.31)	岩下	ニューズレター欧文.....	ウルフ／(岩下)

◆ 人物往来 ◆

ニュース 121 号以降のセンター訪問者 (客員、道央圏を除く) は以下の通りです (敬称略)。
 [岩下／大須賀]

- 5 月 14 日 屋良朝博 (沖縄タイムス論説委員)
- 5 月 22 日 Iaroslav Shulatov (東京大)
- 6 月 4 日 趙全勝 (アメリカン大)
- 6 月 7 日 Andrej Malchukov (ロシア科学アカデミー言語学研究所)、Paul Wexler (テルアヴィヴ大、イスラエル)、工藤信彦 (全国樺太連盟)
- 6 月 8 日 安田稔 (パーミンガム大、英国)
- 6 月 17 日 Jouko Lindstedt (ヘルシンキ大、フィンランド)
- 6 月 18 日 日臺健雄 (一橋大)
- 6 月 25 日 Werner Stuflesser (EURAC、フィンランド)
- 7 月 1 日 高橋美野梨 (日本学術振興会特別研究員・筑波大)
- 7 月 6 日 Zhang, Yingjin (カリフォルニア大学サンディエゴ校、米国)、伊藤美和子 (大阪大他)
- 7月7-10 日 Mark Bassin (セーデルテルン大、スウェーデン)、Chen, Lei, Tsypylma Darieva (筑波大)、Anna Florkovskaya (スリコフ芸術学院、ロシア)、Mischa Gabowitsch (アインシュタイン・フォーラム、ドイツ)、Gu, Zheng (復旦大、中国)、Elza-Bair Guchinova (民族学人類学研究所、ロシア)、Elena Ikonnikova (サハリン国立大、ロシア)、Lei, Qili (華東師範大、中国)、Irina Melnikova (同志社大)、Dragana Mitrovic (ベオグラード大、セルビア／同志社大)、Erik Schicketanz (東京大)、S. V. Srinivas (バンガロール文化社会研究センター、インド)、Aida Suleymenova (国際日本文化研究センター)、Lisa Ryoko Wakamiya (フロリダ州立大、米国)、William White (国際ビジネス経済大、中国)、Vadim Zhdanov (フリードリヒ・アレクサンダー大、ドイツ)、Liudmila Zhukova (ロシア人文大)、Bennett Zon (ダーラム大、英国)、赤尾光春 (大阪大)、安達祐子 (上智大)、池田嘉郎 (東京理科大)、石井明 (東京大名誉教授)、伊藤融 (防衛大)、伊東信宏 (大阪大)、井上貴子 (大東文化大)、井上まどか、

岩田賢司（広島大）、宇多文雄（上智大）、梅津紀雄（工学院大）、大串敦（早稲田大）、岡部達味（東京都立大名誉教授）、片原栄一、加藤篤史（青山学院大）、木村崇（京都大名誉教授）、小長谷有紀（国立民族博物館）、米家志乃布（法政大）、金野雄五（みずほ総合研究所）、下斗米伸夫（法政大）、杉本良男（国立民族博物館）、杉山直子（日本女子大）、千野拓政（早稲田大）、唐亮（早稲田大）、月村太郎（同志社大）、富澤かな（東京大）、中居良文（学習院大）、中村靖（横浜国立大）、西山克典（静岡県立大）、乗松亨平（東京大）、袴田茂樹（青山学院大）、浜由樹子（津田塾大）、兵頭慎治（防衛研究所）、福岡加容、藤本和貴夫（大阪経済法科大）、藤原潤子（総合地球環境学研究所）、古矢旬（東京大）、細井長（國學院大）、丸川知雄（東京大）、三谷恵子（京都大）、三宅康之（愛知県立大）、三輪博樹（中央大）、毛里和子（早稲田大名誉教授）、毛利公美（一橋大）、本村真澄（JOGMEC）、森谷理紗（モスクワ音楽院）、山口昭彦（聖心女子大）、山根聡（大阪大）、吉田修（広島大）、吉村貴之（東京外大）

7月15日 Andrej Bekes（リュブリャナ大、スロベニア）

7月20日 Robert McMahon（オハイオ州立大、米国）

7月26日 江村公（京都造形芸術大）

7月27日 Mikhail Alekseev（サンディエゴ大、米国）、Andrew BurrIDGE（ダーラム大、英）、Olga Davydova（フィンランド外務省）、Matti Fritsch（カレリア研究所、フィンランド）、Ekaterina Glazacheva（ロシア地域プロジェクト）、Bill Hepburn（ヴィクトリア大・院、カナダ）、Michael Hutt（ロンドン大、英国）、Jabin Jacob（平和紛争学研究所、インド）、Jussi Laine（カレリア研究所、フィンランド）、Ladislav Lesnikovski（東京外国語大・院）、Li, Yingfang（復旦大、中国）、Carolin Liss（グリフィス大、オーストラリア）、Ma, Bin（同）、Can Mutlu（オタワ大・院）、Sergey Ryazantsev（ロシア社会政治研究所）、Wu, Chia Jung（臺灣大、台湾）、Zhang, Yongpan（中国国境問題研究所）

7月30日 大山麻稀子（横浜国立大）

8月2日 志田仁完（一橋大）

◆ 研究員消息 ◆

山村理人研究員は1月19日～2月1日の間、グローバルCOEプログラムに関する調査のため、ロシア、ウクライナ、カザフスタンに出張。

岩下明裕研究員は1月21～30日の間、新学術領域研究に関する調査及び資料収集のため、韓国に出張。2月17～21日の間、グローバルCOEプログラムに関するコンファレンス出席及び資料収集のため、米国に出張。3月6～12日の間、グローバルCOEプログラムに関する国際会議出席及び報告、フォーラム参加のため、韓国、米国に出張。3月26日～4月1日の間、外務省関連会議への出席のため、米国に出張。4月14～18日の間、グローバルCOEプログラムに関する会議報告等のため米国に出張。6月13～21日の間、グローバルCOEプログラムに関するセミナー研究報告及び研究打合せのため、フィンランドに出張。6月25～29日の間、グローバルCOEプログラムに関する国際学術大会にて研究報告及び研究打合せのため韓国に出張。7月11～19日の間、グローバルCOEプログラムに関する学会出席のため、イスラエルに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は1月28日～2月6日の間、科学研究費研究に関する資料収集のため、米国に出張。6月13～25日の間、科学研究費研究に関する資料収集のため、米国に出張。7月21日～8月1日の間、科学研究費研究に関する国際会議にて研究報告及び資料収集のため、スウェーデン、ロシアに出張。

松里公孝研究員は2月2～4日の間、新学術領域研究に関するセミナーに参加及び報告のため中国に出張。2月17～22日の間、ITP関連の催しに講師として出席のため、米国に出張。2月22日～3月2日の間、新学術領域研究に関する国際セミナー出席及び研究打合せのため、

インドに出張。3月2～10日の間、科学研究費研究に関するソウル国際会議出席及び新学術領域研究に関するセミナー出席のため、韓国に出張。3月13～30日の間、グローバルCOEプログラムに関する現地調査のため、トルコ、シリアに出張。4月17～23日の間、科学研究費研究に関する国際会議参加のため、ロシアに出張。4月26日～6月29日の間、中国におけるスラブ・ユーラシア研究の現状調査のため、中国に出張。7月25日～8月2日の間、科学研究費研究に関する国際学会世界大会における成果発表及び意見交換のため、スウェーデンに出張。

野町素己研究員は2月6～12日の間、新学術領域研究に関する現地調査および共同研究に関する打合せのため、ロシアに出張。4月14～25日の間、新学術領域研究に関わる国際会議および共同研究打合せのため、米国に出張。6月28日～7月6日の間、グローバルCOEプログラムに関する現地調査のため、セルビアに出張。7月25日～8月3日の間、科学研究費研究に関する国際学会世界大会における研究報告のためスウェーデンに出張。

望月哲男研究員は3月3～6日の間、科学研究費研究に関する国際会議出席のため、韓国に出張。6月13～19日の間、新学術領域研究に関する学会報告のため、イタリアに出張。6月30日～7月3日の間、科学研究費研究に関する会議参加及び資料収集のため、ロシアに出張。7月24日～8月2日の間、新学術領域研究に関する国際学会世界大会における成果発表及び意見交換のため、スウェーデンに出張。

家田修研究員は3月18～30の間、研究会出席、ラウンドテーブル参加及び報告、ドナウ川ダム調査、共同研究打合せのため、英国、ハンガリー、ドイツに出張。6月14～24日の間、研究会出席と現地調査のため、ハンガリーに出張。

林忠行研究員は4月24日～5月6日の間、グローバルCOEプログラムに関する調査、資料収集のため、チェコ、スロバキア、ハンガリーに出張。

長縄宣博研究員は5月18～29日の間、科学研究費研究に関する国際会議での研究報告及び資料調査のためロシアに出張。7月25日～8月2日の間、新学術領域研究に関する国際学会世界大会における成果発表及び意見交換のためスウェーデンに出張。

宇山智彦研究員は5月18～29日の間、カザフ国立大学歴史学部大学院での集中講義及び文献調査のため、カザフスタンに出張。7月28日～8月2日の間、新学術領域研究に関する国際学会世界大会における研究成果発表のため、スウェーデンに出張。

田畑伸一郎研究員は6月13～18日の間、国際フォーラムでの報告及び交流協定締結のため、中国に出張。7月25日～8月9日の間、新学術領域研究に関する国際学会世界大会における成果発表及び意見交換のため、スウェーデンに出張。

(ニュース前号で、事情により掲載しなかった期間も含まれます。)

夏期国際シンポジウム、有意義だったのはセッション だけではなかったようです。

エクスカーション (2010. 7. 10) 他のように

by 2 階プロジェクト室の有志



エクスカーション参加者と小樽運河にて。参加者の方々には小樽の街を通して日本文化を味わっていただけたのではと感じました。



小樽の鯨御殿にて。初めて和服(鯨漁の作業服)を着たわと楽しそうに写真を撮る様子。



全プログラムを終えてバーベキューパーティー。参加者にはホッとした表情も。



全体を通して親睦の輪が広がりました。

エッセイ 木村崇

望月哲男訳『アンナ・カレーニナ』

ロシア文学翻訳最優秀賞受賞までのみちのり

p. 15

松里公孝

戦争描写のアクション・ソープオペラ化

p. 18

野町素己

生き残りをかけるもう一つのブルガリア語文化：

セルビアのバナト・ブルガリア語の現状

p. 20

2010年8月20日発行

編集責任

大須賀みか

編集協力

家田修・岩下明裕

発行者

望月哲男

発行所

北海道大学スラブ研究センター

060-0809 札幌市北区北9条西7丁目

Tel.011-706-3156、706-2388

Fax.011-706-4952

インターネットホームページ：

<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>